

「ダルマさん、ダルマさん、にらめっこしましょ……」と歌って、子供の頃に遊んだ記憶はありませんか？ 身近な存在のダルマさん、つまり達磨さまは、果たしてどのような方だったのでしょうか。

曹洞宗そうとうしゅうでは、達磨さまだるまのことを正式に「震旦初祖しんたんしよそ 円覚大師えんがくだいし 菩提達磨大和尚ぼだいだるまいおしょう」と呼び、大切にしています。

最初の「震旦しんたん」とは、今の中国のことです。「初祖しよそ」とは、インドから中国へ禅を伝えた最初の人という意味です。次の「円覚大師えんがくだいし」は、位の高い僧侶につける尊称そんしょうで、中国唐の時代に達磨さまに贈られたものです。最後の「菩提達磨」は、古いインドの言葉、サンスクリット語で「ボーディダルマ」という達磨さまの名前を「菩提達磨」と音訳したものです。

インドの僧侶である達磨さまだるまは、香至国こうしこくという国の第三王子としてお生まれになったと伝わっています。幼いころより聡明で、般若多羅尊者はんによたらそんじゃという僧侶にその力量を認められ、弟子となりました。そしてインドから中国へ禅を伝えるという大切な役目を受け、お釈迦さまから数えて二十八代目の弟子として、六十歳をこえてから中国へ禅を伝えたといわれています。

その中国では、南北に王朝が分かっていた時代、南の梁りょうという国の武帝ぶていに会って禅を伝えようとしたが、話がかみ合いません。そこで、北の魏ぎという国の嵩山少林寺すうざんしょうりんじへ向かい、そこで九年間坐禅を組み、本当に道を求めようとする弟子が現れるのを待っていました。九年目に神光しんこうという方が達磨さまの噂を聞き、「是非弟子にしてください」と強く願い出ましたが、なかなか認められませんでした。しかし、道を求めようとする熱意えかが伝わり、慧可えかという名前を頂いて、やっと弟子になったという逸話が残っています。

達磨さまが中国へ禅を伝えなければ、いまの曹洞宗はありません。

十月五日は、達磨さまの亡くなった日といわれ、曹洞宗では達磨忌法要だるまきを営みます。大変な思いで伝えられた禅の教えをしっかりと守り、更に発展こうせいさせて後世に伝えていくという思いを持つためにも大切な行事です。

多くのみなさまに親しまれている達磨さま。曹洞宗のお寺では、達磨さまがまつ祀ら

れていることが多いので、もしご覧になれば、手を合わせ、禅を伝えた達磨さまに思いを馳<sup>は</sup>せてみてはいかがでしょうか。

— 終 —